大学生に書かせる自分史の試み・2
―授業の課題としての自分史―

宮　地　啓　介

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第55号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2010, Vol. 55. 111 ～ 121

報告・資料

大学生に書かせる自分史の試み・２
――授業の課題としての自分史――

An attempt to have college students write their ‘Jibunshi’ autobiography : part two

宮　地　啓　介

キーワード：自分史、歴史叙述、社会科概論、大学生

はじめに

授業での自分史作りに関する第２報である。前報告では、自分史とは何かといった基本的な理念に関する議論とともに、自分史が社会に広まり定着していった時代背景と授業への導入経過をまとめた。そのため、自分史作りの背景的な話が主になった。今回は授業で提案する自分史の内容について紹介し、授業で行う作業にも触れる。

本報告で取り上げる自分史作りの特色は、次のような点にある。１）社会科関連の授業の課題であること。そのため、自分の視点と体験を軸に社会を捉えることにつなげる、という意図が込められている。２）自分のことを材料に「歴史を書く」体験をさせること。結果として、社会を捉える際に歴史的視点も意識できるようになれば、という期待も込められている。さらに、それらを、３）ちょうど大人になろうとする時期を迎える年齢層の学生たちを対象に取り組ませていること。これらは大学の授業であることから生じている事情ではあるが、３）については、小中学生など、もっと若い層を対象にした自分史作りもある中で、大学生にどれだけ歴史らしい自分史が書けるか、という考察点が伴っている。これらの意図は、あくまでも提案する側（授業担当者）のものであり、学生の作品である自分史がその通りになっているという意味ではないが、課題や作業が特定の内容に決められている事情はまさにそこにあるので、自分史作りの内容紹介とともに解説していきたい。

課題としての自分史

「社会科概論」での自分史作りは平成21年度で20年目を迎えた。前報告でも触れたが、この授業のテーマは、手仕事によるモノ作りと自分史作りの２本立てとなっている。講義は両方の内容をカバーし、授業中に行う課題や宿題は受講者全員が共通して取り組むが、期末に提出するレポートは、受講者がモノ作りか自分史のどちらかを選択する[(1)]。平成20年度に自分史を最終的に提出したのは19人、21年度は37人であった。

ここではまず、「社会科概論」の課題として取り組んでいる自分史とはどのようなものか、その内容について整理しておこう。

１. 基本構成と叙述

本授業の自分史では、①本文、②共通項目、③まえがき・あとがきの３つの要素を含むのを原則としている。①は、分量・内容どちらにおいても、自分史の大半を占める部分である。これに③が付くのは当たり前のことのように思われるであろうが、最近の学生には、わざわざ項目として挙げて、それらが何のために

要るのか注意を喚起しておいた方がよいようだ。その理由は、問題点を整理する序論なしに、いきなり本論を始め、その結果、結論があるのかないのかよく分からない、意味不明朗なレポートを書いてくる者も少なくないからである。②は自分と社会との関わりを意識させるために入れてある。これらは実質的には自分史年表、家族紹介、郷土紹介であるから、一般の自分史でも何らかの形で含まれている。授業では、それぞれの内容と意味を解説しながら、時間内にあるいは次週までの宿題として、全員が練習用の課題をこなすことにしている。

①本文は、文章を主体とし、適宜その中に写真や挿絵などが挟み込まれている形を原則としている。趣味的に作るのであればどのような形でもよいはずであるが、（前報告で検討したように）他人にも分かるように書くためには、ある程度連続性のある話として、自分の言葉で語ることが望ましい[(2)]。

話の中身は、「生まれてから現在の私に至るまでの物語」である。もちろん、ここでの「物語」はフィクションという意味ではない。歴史を「叙述する」という意味で、自分史を書く人が自らの過去のできごとについて「物語る話」のことである。それは、自分自身がこれまで歩んできた道について語ったひとまとまりの話であり、大学生にとっては自己の成長物語である。

これをどのように物語るかということだが、一般的には、生まれた頃の話から順番に、時間の流れに沿って、できごとや思い出を語っていく。その際、いくつかの部分（章や節）に分けるのがふつうでる。これまでの事例では、分け方は保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と、通っていた学校等の段階毎に区分するのがほとんどで、その区分がそのまま章立てになることが多い。もちろん、テーマ別の章立てや章の合間にコラムなどの特集ページを設けるなどの各自各様の工夫はあるのだが、たいていの場合そうなってしまうのは、それなりの理由がある。

これは時代区分の問題でもある。時間の流れはひと続きであるとはいえ、話が区切りなしにベタで続いていては茫漠として捉え難い。したがって、われわれが過去の歴史を学ぶ時には、いくつか理解しやすい単位に区切ってできごとを整理しようとする。区切る基準となるものは、一般の歴史でいえば政治体制や政権の所在などがある。いずれにしても、「〇〇時代」と名付けた場合、そのひとまとまりの単位は〇〇という名称で一括りできると捉えた時間である。その期間はこの名称で定義できる、同じ性質を持つ時間と考えていることになる。とすれば、どこで区切るか、それにどのような名前を付けるか、時代の分け方はその歴史を語ろうとする人の認識（歴史観）と関わっている。もっとも、歴史認識は各人各様で一人一人違うはずだが、それで時代区分もばらばらになってしまうというわけではない。大枠ではみんなで共有し合っている部分があって、ふつうは「常識的な分け方」というものがあるからである（例えば、現代の日本人の多くに通用する、昭和や平成などの年号のように）。小・中・高などの学校段階による区分もその１つと考えてよいだろう。

要するに、大学生のようにまだ学業の途中にある人にとっては、小・中・高などの区分の方が解りやすいのである。言い換えれば、彼らはまだ学校や学年という枠組みで社会を捉えている面が強いということになる。実際のところ、学校等の段階は子どもから大人への成長段階と対応している。しかし、この枠組みはどの年齢層の人にとっても有用であるわけではない。何十年も前に学業を終えて社会人となった人にとっては、学校や学年よりは職場や勤務地の方が問題であるかもしれない。あるいは、自分史のテーマが中高年での社会的活動である場合、子ども時代の比重はそれほど大きくないだろう。大学生の書く成長物語であるから、自然にそのような叙述の形式に落ち着くのであろう。そこには、自分史を書くのがだれかということが、どのように叙述するのかをある程度規定するという一面が表れている。

②共通項目は、自分史作りを授業に導入した頃に参考にした冊子から取り入れたものである[(3)]。それぞれ「私の履歴書」、「わが家の家系図」、「わが家の周

辺図」と称してきたが、授業では前述した実質の内容を示す名称を使うことも多い。というのは、時々タイトルに引きずられて、文字通り「履歴書」「家系図」「周辺図」を書いてくる弊害も見られるからである。例えば、「わが家の周辺図」だからといって、自宅とその隣近所の狭い範囲だけを書いたのでは、自分が生まれ育った土地（わが町）の紹介にならないだろう。何のためにそれを書くのかを意識させ、話があまり狭い世界に限定されないよう配慮する必要がある。いずれの項目も、それを作成することが「私と社会とのつながり」を確認する上で助けになるとの判断で、全員が取り組む課題に指定されているのである。

共通項目の内容は、本文で扱う内容と重なっている。文章とは別の表現形式で叙述した本文といってもよい。それらを文章で書けないわけではないが、図表にした方が断然分かりやすい。そのような全体に関わるテーマを特集として入れることで、本文の叙述を補うという意味がある。それぞれの詳細については、節を改めて述べたい。

自分史の提出版には、いきなり本文の叙述に入るのではなく、一般の本と同様に、③まえがき・あとがきを付けてもらうことにしている。どちらも単なる添え物ではない。まえがきは自分の物語へと読者を導くための前置きとして、あとがきは話が突然切れないように締めくくりとしての役割がある。出会った時、別れる時に挨拶をするのと同様に、他人に読んでもらう前提で執筆する限りは、備えておくのが当然の項目であろう。まえがきはこの自分史で書きたいこと、テーマや抱負を述べる部分であり、あとがきは自分史を書いてみて思ったことを書く部分である。論文ほど厳密な序論と結論の対応が要求されるわけではないが、竜頭蛇尾などと言われない程度には首尾一貫していることが望ましい。

まえがきとあとがきは、それぞれ書く人によって違いが出るが、どちらかといえば、あとがきの方がバラエティに富んでいて、その人らしさが出ていることが多く、その分読んでいて面白い。一方、まえがきは比較的改まった意識で書くので、みんな似たような真面目な話になりやすい。また、実際の作業の流れでいえば、まえがきを最初に書く人は少ない。むしろ、本文をあらかた書き終わってから書くのがふつうであろう。そのため、「今から１つの物語が始まる」という気持ちが文章に出難いのかもしれない。それに対して、あとがきは実際にも作業をほぼ終えた後に書くので、ひと仕事やり終えたという達成感など、その時の実感がこもっている。最後は徹夜で書き上げ、文末にその年のレポート提出締切りの日付と時刻が書かれているといった例も珍しくない。やっと間に合った！というわけである。あとがきには、そのとき感じたことだけでなく、自分史を書いた結果見えてきたものも書かれている。この点は学生にとって自分史を書く意味とも関わることなので、次回の報告で紹介したい。

２. 自分史作りの意味と目標

前報告では、自分史の意味について議論する中で、こう述べた。自分史作りに何らかの意義があるのは確かだとすれば、「後から付いてくる」効用をあれこれ考える前に、まず書いてみることが肝要であると[(4)]。実践論としてはその通りであろう。理念だけをいくら論じていても、歴史叙述にはつながらない。ただ、それは何も考えず、行き当たりばったりで書くことを勧めているわけではない。第一、授業の課題として大勢の学生たちに自分史作りを提唱しているのだから、無目標というわけにはいかない。「とにかく何か書いて見なさい」というのは、先に意味や効用が分かっているから自分史を書くのではなく、それを書く過程で意味を考えたり、書いた結果として何かが見えてくることがあるだろう、という意味合いを含んだ提言なのである。導入時に示す意味や目標（授業担当者の意図）と、書いてみて学生自身が見いだした意味とは区別する必要があるが、ここでは前者について紹介しておこう。

多くの「自分史のすすめ」で説かれていることは、執筆にあたって、まずテーマと構成を考えるということである。これは結局「何のために書くのか」という話にもつながるのであるが、その前に何を書こうとす

るのか、テーマが決まっていないと文章は書けないし、たとえ書いてもとりとめのない雑談に終わってしまう。だから、書きたいこと・伝えたいことをはっきりさせなければならない。しかる後に、その主題をどう展開していくか、構成をしっかり練る必要があるというわけである[5]。

中里登美雄は、自分史講座の作品や自身の例を挙げながら、1）自分の存在を残す、2）事実を明白にする、3）自分の生き方を知ってもらう、4）人生の展望台に立つ、この4つの表題で自分史を書く目的を語っている[6]。目的1）は自分史によって自分が生きた証を記録して残すことであり、目的3）とも通じている。目的2）は、しばしば曖昧で不確実なままになっている、自分や自分と関わりのある人々や事柄に関するデータを、自分史執筆のために調べて明確にすることである。目的1）～3）はすべて、その人がいなくなると失われてしまう人生やできごとの「記録を残す」という意味がある。さらに、目的4）は自分史を書くことによって執筆者自身が得ることのできる展望であり、これは歴史的視点を適用することの効用である。また、自分史を書くことによって得られる効用として、中里は次の5点を挙げている[7]。①自分を見つめ直す良い機会となる。②今後の生きる道が見えてくる。③自分の人生に自信が出る。④資料として役立つ。⑤老化防止に役立つ。これらのうち、効用①・②は上述の目的4）と対応することであり、「記録を残す」という意味では効用①～④が対応している。

ところで、効用④自分史の資料性もそうだが、特に効用⑤の老化防止については、若い人が意識することはほとんどないはずである。一般に、自分史講座の受講者は年配の人々が多く、自分史入門書も比較的年齢層の高い人向けに書かれているのがふつうである[8]。自分史作りは素材となる時間が多い「歴史の長い人」向きの趣味であるといえなくもない。逆に、振り返る人生よりもこれから先の人生の方が長い人にとっては、もう少し別な意味付けが必要になるだろう。世代や年齢層による意味の違いも考慮すべきである。

冒頭に述べたように、自分史作りの目的は、授業の課題として大枠はすでに決まっている。その上で、導入時に示す自分史作りの意味付けは、大学生という年齢層に合わせて、次の2つに絞っている。

ひとつは、大学生の場合は話の内容がほぼ成長物語になるという事情から、「自分探し」という意味である。前報告でも触れたが、「社会科概論」の開講学年は、学生たちの多くがちょうどその年度に20歳を迎える2年次である。彼らは一応大人として扱われているが、就職や結婚など、社会的にはまだこれからの可能性として残されている部分もたくさんある。つまり、社会の一員としては、まだ自己を確立途中の段階にあるといってよいだろう。そのような人が書く自分史は、自分という人間の基礎が作られてきた過程を振り返ることが中心になるだろう。つまり、自分がどのような人間なのかを確認する、換言すれば自分を探す旅である。「私はこれまでこのように成長してきた。これから先は…」というのが、いつも導入時に示す自分史の語り口である。若い人の自己探求の視線は、懐かしい過去だけでなく、わりと素直にこれからの生き方（未来）にも向けられるようだ。そのため、「これから先は…」の部分は実際に文章として書くとは限らないのだが、彼らの自分史には、話はまだずっと先まで続いていくという意識が明瞭にうかがえる。このような傾向は、いずれ学生たち自身の発見を検討する際に確認したい。

もう1つの意味は、自分の記憶の補足や明確化、すなわち、前述の「記録を残す」ことである。歳を取るにつれて忘れていくことも多いが、幼年期については、もともと自分自身が覚えている部分が多くないものである。そうでありながら、その時期は自分という人間の基礎が作られた重要な時代でもある。主として個人の記憶が頼りとなる庶民の歴史では、このような記憶の不確かな幼少期のことを親兄弟などから聞き出して、事実を明確にしておくことは、意義あることなのである。大学生という年代は、このような作業にはちょうど良い時期でもある。幼少期についてちょっと距離感を持って、今の自分とは区別しながら探求できる年齢であること、親や友人などに聞き取り調査など

をしても、比較的回答を得やすい、近い過去であることなどの事情が挙げられる。後者の面でいえば、取材が遅くなればなるほど、探るのが難しくなるのがふつうであるから、この自分史作りが良い機会となる。

以上の２点を大学生にとっての意味として示しながら、「社会科概論」という授業の課題として、「自分のことを材料に歴史を書いてみる」ことを提案している。その作業は、自らが歩んできた歴史を振り返り、自分とはどのような人間なのか、客観的に捉えて説明しようとする試みである。

前報告でも述べたが、名前は自分史であるが、自分のことだけで話を作ることはできない。自分のことを他人に説明するためには、これまで自分が関わってきた人々についても説明しなければならない。それだけでなく、話を理解する前提として必要な、その時代の社会常識もふまえて書かなければならない。その意味で、自分史作りは社会とつながっている。「書く歴史」に関連して、佐藤卓己は、歴史が現在における過去の記憶であるとすれば、各個人は「自己の歴史家」ということができるが、社会システムの中で生活している現代人の記憶も個人的なものではあり得ないという[9]。それゆえ、（歴史の方法論を学び研究を蓄積していけば）自分史が優れた社会史になる場合もあるという話になるのだが、「社会科概論」の受講者は歴史研究者をめざしているわけではないので、ここでの議論はこのくらいにしておく。

自分を表現し位置づける・その１

自分史作りはそれ全体が自分を表現する試みであるが、すでに述べたように、授業で指定している３つの共通課題には「私と社会とのつながり」を確認する意図が込められている。つまり、ある特定の社会システムの中に生きてきた自分を、社会との関わりにおいて捉えて位置付け、それを自分史の一部として表現しようというわけである。

１.「私の履歴書」

履歴書といっても、就職活動に使うためのものではない。要は自分の年表を作ってみようということである。年表を作る意味には、次の２つの面が考えられる。１つは、自分史作りの作業を進める上でのメリットとして、構成を練る助けになること。もう１つは、特定の時代・社会に自分の歴史を位置づける作業を通して、自分のもつ時代性を捉えて表現する上で助けになることである。

話をどう展開していくのか、全体計画を立てるという意味では、年表作成は最初に取りかかるべき作業であろう。自分に関するできごとを「一覧表」にしていくわけであるから、そのメリットは一目で自分のたどってきた人生を見渡すことができるという点にある。ということは、見取り図としてのメリットを損なわないように、データの記入は簡潔にした方がよいことになる。文章というよりは、事実をキーワードや簡単な箇条書き程度で記入していく。年表を作りながら思い出したできごとの詳細やその時の気持ちなどについては、本文に回すべきである[10]。

年表をひたすら詳しく書いていけば、いつのまにか本文ができあがるというものではない。かつて、年表作りにのめり込んだ学生が、このままデータを詳しく記入していって、年表形式で本文を書いてみたいというので、それを試してみたことがあった。しかし、でき上がったのは、断片的なできごとがただ並んでいるだけの表であり、それぞれがとても細かい説明になっている分、「読み難い」という印象の方が強かった。やはり年表と本文は別物であって、本文の叙述では、ひとつひとつのできごとを解説するだけでなく、それらをひとつながりの話としてつないでいく努力が必要になる。年表と本文では、その役割は区別した方がよいのである。すなわち、年表で自分史が対象とする範囲を一通りカバーしておいてから、本文で詳しく語っていく、という風に。このような年表には「先に全体像を大まかに示しておく」意味がある[11]。この年表を、全体の骨組みや登場する主要な話題を示した概要として利用しながら、取り上げる項目を整理し、ひと

続きの物語へと肉付けをしていけばよい。

年表で自分の経歴を見渡していると、人生の節目となる所がいくつか見えてくる。それが章立てに反映されることも多いだろう。一般的には、誕生、入学、就職、結婚などであるが、先述の通り、大学生くらいであると、小・中・高などの入学・卒業が区切りになりやすい。だからといって、入学や卒業のデータだけを書き並べたのでは、面白みのない年表になってしまう。また、その人にとっての転機となるものは、親の離婚といった家族の変化など、いろいろ考えられる。他にも、子どもにとって影響が大きいのは、引っ越しとそれに伴う転校である。いわゆる転勤族の家庭に育った学生の場合、年表や本文の章立てが、学校の入学や卒業とは別に、過ごした土地毎にステージ分けされていることがある。このように自分なりの時代区分を考えてみることは、作業上のメリットがあるだけでなく、自己認識を深める上でも助けになるであろう。

では、一個人の歴史に関する年表に、しばしばその時々の社会のできごとなどの欄を付けるのは、何のためであろうか。確かに、自分のことばかりでなく、周りの人々のことも加え、世相・風俗・流行なども書き加えておくと「話をふくらませるときに便利」であり、話がより具体的なるのは事実である。が、それだけではない。その当時の社会背景も入れて書いた方が、話がよりリアルになり、「自分と社会とのかかわりを明らかにする」ことができるのである[12]。これは授業の目標とも関わっている。

自分史は、私という一個人の物語である。しかし、自分だけの世界で完結したのでは、話が宙に浮いてしまう。自分のことを知らない他人には、それがいつどこであったことなのか、具体性や現実味が乏しい話にしか見えない。自分史の物語は「昔々あるところに…」では困るのだ。この導入句を使うのは、それが特定の時代・社会の制約を離れて、ファンタジーの世界に入るための約束事になっているからである。自分史では逆に、特定の時代・社会という枠組みを指定し、それを意識することで、その世界の中に自分の足跡を位置づける。橋本義夫は「ふだん記」運動を指導した自分史の先駆者であるが、彼がまず自分の年表を作れと主張した意図もそこにある。橋本によれば、「生まれ育ってきた地域の年表と、日本と世界の出来事と、自分の身辺関係の年表をつくる」ことで、自分史が客観的な社会の動きと結びつき、それによってはじめて他人に感動を与える文章になるのである。彼が自分史を客観的に位置づける方法として勧めたのが、この年表を作ることと手許に地図を置くことの２点であった[13]。

特定の時代・社会という枠組みの中に自分の歴史を位置づけることとは、自分のもつ時代性を意識することである。それがどのような発見につながるのかという話は、学生たちの反応を紹介する際に取り上げるが、その時代性というものはどう表現すればよいのだろうか。結論から先に述べれば、その方法とは、他の人々と共有している記憶を利用すること、つまり「特定の時代を象徴するものやできごとと結びつけて、自分のできごとを語ること」である。

自分がその中で育った環境は、当人にとっては空気のように当たり前のものであり、それ故に自分のもつ時代性を明確にするのは意外に難しい。世相や時代の雰囲気となると、もともとが曖昧でつかみ難く表現し難いものである。とはいえ、自分史作りは時代背景を追究するのが主目的ではないし、原理的に時代背景の全くない自分史を書くこともできないはずである。そうであれば、自分史を書いた結果、その人が育った時代の姿が少しでも見えてくれば、という程度に考えておけばよいだろう。

自分のできごとと結びつける事柄、つまり何を時代性の表現に使うかということだが、これを考える上では、都合の良い条件がある。授業でみんなが一斉に同じ種類の作業をするという点である。自分史関係で授業中に行う最初の課題は、「あの頃の私・世の中」である。これは５年前と10年前を基点に、各自がその頃の自分と覚えている社会のできごとなどを書き出してみる作業である。２つの時点は、10年ひと昔という考えを参考にして、それとその半分くらいの期間に決めたが、学生たちには程よい時間の隔たりであるよう

だ。去年・一昨年のことであれば、特に何かを参照しなくてもいろいろ思い出せるものである。ところが、５年という間隔は案外中途半端な過去である。むしろ10年前のことの方が思い出しやすかったりするくらいであるが、どちらもしばらく記憶をたどって考えをめぐらせなければならないくらいには隔たっている。それ以上遡り過ぎても覚えていることが少なくなるはずで、５年前・10年前というのが程よいスパンなのである。

さて、大学２年生にとって、５年前は中学３年生の頃、10年前は小学校４年生の頃に相当する。この共通の学年という条件が糸口となり、最初は一人一人が５年前には何があったのか思い出す作業であったのが、みんなでいっしょに考える課題に転化する。例えば、５年前であれば、中学最後の部活や高校受験といった共通の経験を隣同士で語り始める。そして、だれかが思い出したのをきっかけに、その年のできごとや当時流行ったことが、教室全体の話題になっていく、といった具合に。書き出すべき項目は、「やっていたこと、熱中していたこと」「覚えている社会のできごと」「流行っていたもの」の３項目である。ここで、自分が熱中していたことや身近な所で流行っていたことが次々に思い出せた人は、早くも自分史作りの追体験モードに入っているといってよいだろう。それに比べると、社会のできごとはすぐには思いつかないようである。とくに、まだ小学生であった10年前については書き出せる項目はいつも少なめになる。授業中の課題は、参考資料もなしに、20分程度で書いてもらうので、これはやむを得ない結果である。作業の後には、同じ時代性を共有し合っていることに気づいてもらうために、いくつかその年にあった代表的なできごとを紹介し、学生たちにもっと多くの経験を思い出す手がかりを提供するようにしている[14]。

ところで、過去のできごとなどの事項は、今ではネットで検索すれば手軽にかつ細かいことまで調べることができる。そのため、次週までに書いてきてもらう課題では、「生まれた頃」「幼稚園・保育園に入った頃」「小学校入学時」「中学校入学時」「高校入学時」と、記入すべき時点をもっと細かく分けて、年表を作ってもらうことにしている。その際、自分のできごとと結びつける社会の動きについては、その人の関心の範囲、世代、育った地域などによってだけでなく、読者をどのような人と想定するかによっても、選択される事項に違いが出るだろう。全国の幅広い世代の人々が覚えているできごとを使えば、より多くの人々に通じる話になる。年表を自分史の客観的位置付けのためのものとするのであれば、記入するできごとや話題は狭い範囲の内輪ネタにならないように心がける必要がある。

２.「わが家の家系図」

家系図作成というと、ルーツ探しをイメージする人もあるだろうが、この課題の意図は、人と人との関係という面から、自分を社会の中に位置づけることにある。自分とかかわりのある人々の中で、最も早い時期から関わってきた家族を紹介することを通して、自分がある特定の人的ネットワークの中で生きてきたことを確認することが目的である。

というわけで、授業ではいきなり家系図の話にいくのではなく、まず「私とかかわりのある人たち・１」という課題で、「私の関係者」を書き出してもらう。内容は次の通りである。配布された記入用紙の中央に「私」と書き、その周辺に自分とかかわりがある人々を思いつくまま書いていく。書き方は個人名でも、同じクラス・サークルの人などのグループ名でもよい。グループ名で書いた以外の人についても、同じ属性の人たちを線で一括りする。その括られたグループや個人名を、中央に書いた私と結んだらでき上がりなのだが、実際にやってみると、この作業は思いのほか時間がかかる。というのは、家族、近所の幼なじみ、小学校時代から大学までの友人や先生、サークル関係の先輩・後輩など、括られる属性には様々なものがあるし、同じ人が複数の属性で自分とつながっていることや、時には、書き出された人同士が自分とは別の関係でつながっていることもある。つまり、人と人との関係が多様である上に重層的になっているので、どう

しても入り組んでごちゃごちゃとした図になってしまうのである。その一方で、書く側には、分かりやすくすっきりと整理して書きたいという意識が働くので、頭を悩ますことになる。そのため、最初の指示通りに思いつくまま書き並べていく人は少ない。ひとグループ毎に顔ぶれを考えながら書き足していく分、時間がかかるというわけである。ともあれ、20分余り経つと、自分の周りに線で囲まれたたくさんの人名やグループ名が、花びらか渦巻き状に広がった図ができ上がる。

このような図は、一般の人が自分史を書く際には、常に必要なものというわけではないが、自分がもつたくさんの人との関係（それもかなり多様で重層的な関係）を確認する上では有効である。図式化することで見えてくることもある。また、本文では結局、自分とかかわりのある人々のことも説明しながら叙述していくことになる。どの範囲の人まで話に入ってくるかは、テーマや分量（詳しく書く程度）によって違うだろうが、一度このような「交友関係図」のようなものを作っておくと、書くべき項目や範囲を検討する際に役立つ。

その次が「私とかかわりのある人たち・２」で、家族や親戚の紹介を書く課題となる。提出用の自分史では、家系図とは別に家族紹介の特集頁を作る者も多いが、これは次回までの宿題なので、１枚の用紙に納まる程度に簡略化した家系図形式で、人物紹介の図を作成する。氏名や年齢など、関係者それぞれの基本データとともに、名前の脇に簡単な紹介のコメントを添えてもらうようにしている[15]。

前述の通り、家系図を作ってみるのは、なぜ自分がここにいるのか、自分の位置を確認することにあるのだから、とくに自分の家系に関心があるのでない限り、ふつうは自分が直接知っている人の範囲で作成すればよいと考えている。最近は核家族化・少子化が進んできているが、それでも祖父母や両親の兄弟関係、その姻戚までもれなく記載しようとすると、煩雑になり過ぎることもある。代を遡るのは祖父母くらいまで、いとこや姻戚などは知っている（付き合いのある）範囲でよい。要するに、自分とかかわりの深い人を優先して書くのが原則である。このような事情から、調べ方は最も手っ取り早い方法、「親などの年長者に聞く」で事足りる。

３.「わが家の周辺図」

自分と社会との関わり方のうち、人との関係を確認する課題が「わが家の家系図」であるが、こちらは地域社会とのかかわり（いわゆる地縁・血縁の地縁）を考えるための課題である。自分の家の周りなど町の様子を絵地図にしてみようという課題で、要するに自分が生まれ育った「わが町」の紹介である。自分が暮らしている町（生活環境）がどのようなものであるのかは、ふだんはあまり意識しないものだが、後述するように、自分の歴史と深く関わっている。また、地図を書くために自分の周りを観察し、さらには町の現状にも目を向ける、このような課題はわが町を見直すきっかけにもなり得るものである[16]。

授業では、まず練習用に「わが家の周辺図・１（大学編）」を書いてもらう。これは（大学生なので）自宅から大学へ通う道筋を中心に生活地域を地図に表してみる課題である。現住所と大学を基点に、両方を結ぶ道筋を用紙に納まる範囲で書く。多くの学生は寮か大学周辺のアパートに住んでいるが、地元出身者の中には近隣の町から自動車通学という者もいて、その場合は途中を省略する工夫が要る。通学路には、道案内をする時と同様、交差点や公共施設・店舗等の目印となるものを書き加える。さらに、自宅周辺や大学周辺で、自分とかかわりの深い所（自分がよく出没する所）について簡単な説明を書き足していく。こうしてでき上がった地図は、大学生一人一人の日常生活範囲を表しているという意味で、自分史の現在を構成する一部分にもなっている。

ところで、ふつうは文章で説明するより図を書く方が簡単そうに思えるが、地図が苦手という人もいるので、課題の出来映えにはかなり差が出る。授業中に短時間で書いてもらう制約もある。地図作製の得手不得手の問題は別として、他人に分かりやすい地図を書

くコツというものはある。練習課題で道案内に書き添えた目印は、地図の客観性・実用性の観点からは重要である。何を目印に選ぶかで、分かりやすさがかなり変わってくるからだ。それ故、市販の地図では、より多くの人に通用するように、（いわゆる地図の常識や一定のフォーマットのように）共通の約束事に従って作られている。授業の課題では実用性・汎用性は問題にならないとはいえ、たいていの人が目印として期待するような施設等を入れておくのは当然である。もう１つ重要なのが固有名詞を入れておくことで、地名等はそれがどこなのか判断するための手がかりとして不可欠である。課題の地図が一般用の地図と違うのは、（友人宅、アルバイト先、母校の小学校など）個人的な関連データが書き加えられている点である。この要素が入ることで個人史の一部（大学生である自分の今）を図で表したものになっている。

このように、自分にかかわりのある事柄を地図にしてみるのは何のためか、学生に示している地図づくりの意味は次の２つである。

１つは「図式化の効用」である。図式化することで自分の頭の中にある曖昧なイメージを形あるものに定着させることができる。自分が生まれ育った土地については、（地名等を用いて）言葉で説明することは可能である。だが、場所などの位置関係やその土地柄のように雰囲気的なものまで、すべてを言葉だけで表現しようとすると膨大な文章量になりかねない。そもそも自分の育った環境のもつ地域性などは、自分では一応分かっているつもりであるが、特に必要がない限り突き詰めては考えていないものである。このようなイメージ的なものは曖昧模糊として、つかみ所のないふわふわした性質のものであるが、それにあえて地図という一定の形を与えようと努力する。イメージが常に100％表現できるわけではないが、ある時点でいったん形あるものにしてみることで、自分自身にも見えるものになる。このようなイメージ定着法としての「…マップ」は多方面で利用されている。上述のように、頭の中から出して客観化することによって発見・再確認するという意味では、文字化して文章で書き出しても同じである。自分史で言えば、これは本文を書くことに相当する。ここで地図作りの課題となっているのは、（題材の性質を考えると）表現しやすさと分かりやすさの両方で、地図化の方が有利だと判断したからに過ぎない。

もう１つの意味は、（授業の目的の１つでもあるが）自分の生まれ育った地域との関係を確認することである。そのため、「わが家の周辺図」は（字面通りに解釈して）向こう三軒両隣の範囲で描いては効果が限られてしまう。「わが町」紹介になる程度に広がりをもたせる必要がある。その結果、自分が育った風土の影響や地域社会とのかかわりなど、自分のもつ地域性が見えてくる。引っ越し経験のある学生の自分史では、以前住んでいた所が懐かしく思えるというのは、よくある話である。このような思いには、その土地への愛着にとどまらず、そこで過ごした時代や生活環境への愛着をも伴っている。その人が属していた環境も、その人の歴史の一部を形作っているのである。

地図を作成する際に留意すべきことは何か、授業で示す作成の要点は以下の通りである。

１）直前に述べたように、ある程度の広がりももつ範囲で書くこと。「ある程度の広がり」とは、「わが町」紹介になる程度が目標であるが、作成者自身の認識する「わが町」という問題と、それをだれに対して紹介するつもりかという問題が相互に関連するので、一概にこれが「わが町」の範囲と決め難い。美作大学の場合、地元岡山県の出身者は３割程度で、学生の出身地は西日本一帯に散らばっているという事情もある。こういう場合は、○○県の△△市、△△市にある□□地域という風に分けて示し、無理に１枚で済ませようとしない方が処理しやすい。必要最低限の範囲の目安は、自宅と自分の通った小学校が収まる範囲である。小学校は学区が決まっていて、徒歩圏内にあることが多いからであるが、もちろんこれにも例外は多いので、あくまでも１つの目安に過ぎない。

２）このような範囲で作成する地図に、共通して入れておいて欲しい要素は４つある。①社会的要素：自分が通った学校、市役所、警察、消防署などの公共施

設や店舗など町の主要施設。さらに、道路、線路、橋など交通関係のデータ。②地勢関係の要素：山、川、海など。土地の起伏や傾斜、方角などのデータ。③歴史的・文化的要素：寺社、庭園等、文化財や記念物、その他の名所旧跡、その土地にまつわる言い伝えなど。④個人的要素：その場所や施設についての思い出やエピソードなど、自分とのかかわり。これらのうち①から③の要素は、ふつうに地図を描こうとすれば当然入ってくる地誌的データである。一般的な実用目的の地図と違うのは④の要素が書き込まれている点で、個人史の一部を表現する内容を含んだ地図であることが重要なのである。

さらに、3）前述の諸要素には、できるだけ固有名詞を入れて書くこと。自分史年表の際に説明したように、自分史の地図が「どこかある所」では困る。実在する特定の場所に関係付けてこそ自分の歴史を表現する地図になり得るからである[17]。

こうして作成する地図は、地形図のように精密である必要はない。授業ではいつも、方角や図への納め方などはかなり自由に描いてもらっている。最近はオンライン・マップのデータから詳細な地図が利用できるので、それにいくつか個人的な説明を書き込んだだけという、お手軽な「周辺図」もたまに見かける。それらも一応、場所の説明になっていないわけではないが、作者の「わが町」に対する認識が窺えないという意味で、物足りなさが残る。既成の地図をコピーして使おうとする理由としては、精確な形を描こうと意識すると、自分で考えて描くのが、つい面倒になってしまうという事情があるようだ。精確さや汎用性にこだわるよりは、自分にとって不要な部分は大胆に省略しつつ、イラストマップ風に仕立てて、挿絵や解説などが入っている方が楽しい地図になる。要は、自分が育った所がどのような土地であるのかが伝われば良いのである。これを意識しながら、できるだけ個人的な要素を書き込んで、「自分独自の地図」に仕上げていくのがこの課題の目標である。

おわりに

今回の報告では、社会科概論で取り組む自分史の内容とその意図について述べてきた。自分史作り全体の意図は冒頭に述べた通りであるが、個々の課題や作業の意図は、それを具体化したものである。期末レポートの評価基準がこれらの意図に対応していることは、言うまでもない。指示された諸条件を満たしていることを最低限の基準とし、なぜ自分史を書いてみるのか、課題としての意味を解説したときに触れた観点を意識しながら評価を決めていく。今年度も、提出された自分史はすべて読み終え、レポートとしての評価を済ませたところである。出来映えは、玉石混淆と言おうか、ピンからキリまでと言おうか…である。締切りという時間的制限のある仕事でもある。それにどれだけ真剣に取り組んだか、差が出てくるのは当然のことで、例年通りの結果といえる。ただし、この自分史作成に夏休み中の少なからぬ時間を注ぎ込んだ、と推測できる作品が大半を占めていたことを、学生たちの名誉のために記しておく。

では、それだけの手間ひまをかけて自分史を作成したことで、学生たちは何を得たのか。また、授業の課題として設定した筆者の意は、学生たちにはどの程度汲取ってもらえているのか。これらについては、学生たちが自分史の核心部分である本文に書いたことと併せて考察すべきである。本文の叙述内容に関しては、紙数の関係もあり、今回は触れる余裕がなかった。これは次の報告で「自分を表現し位置づける・その２」として取り上げる。また、その際には可能な範囲で、提出された自分史作品の紹介もしてみたい。

註

(1) 拙稿「大学生に書かせる自分史の試み・1　―自分史の誕生と広がりの中で―」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』通巻第54号、2009年、110頁。

(2) 前掲拙稿、114–116頁。

(3) 『自分史のつくり方』主婦と生活社、1989 年。

(4) 前掲拙稿、116–117 頁。

(5) 例えば、『自分史のつくり方』主婦と生活社、32-42 頁。中里富美雄『自分史入門』東京書籍、1991 年、122-124 頁。他方、キーワードによる連想や年表への記入方式による時代との関連付けなどの工夫で、文章執筆に際しての敷居を低くしようとするのが、野口悠紀雄『「超」自分史ガイド』ダイヤモンド社、1998 年である。

(6) 中里富美雄、前掲書、28-48 頁。

(7) 同書、50-62 頁。

(8) 例えば、野口悠紀雄は必ずしも高齢者だけに話を限定しているわけではないが、「退職後の生きがい」「20 世紀の総括」「世代間の懸け橋」などの言葉（前掲書、2-3 頁）、さらにはキーワードや年表のカバーする事項を見れば、対象となる読者は、主として中高年層、激動の昭和を生き抜いてきて間もなく退職期を迎える世代の人々が中心であることは明らかである。

(9) 佐藤卓己『ヒューマニティーズ　歴史学』岩波書店、2009 年、133-134 頁。

(10) 中里が「自己年表は自分史を書いていく際の資料となるものだからできるだけ詳しい方がよい」と述べているのは（前掲書、101 頁）、本文用のメモとして材料を貯めていく際の話である。思いつくことを次々に書き込めるように余白を十分にとっておくなどのアドバイス（『自分史のつくり方』［主婦と生活社］50 頁）も同様である。本文の下書き用に作ってみるだけでなく、年表は年表で独立のものを入れるのであれば、読む人にとって分かりやすくするために、事項の詳しさには自ずと限度があるだろう。

(11) これは年譜方式（中里富美雄、前掲書、88-95 頁）を否定するわけではない。個人の一生を年代順に、その年ごとに整理して書くことは可能である。ただ、読む人にとっても書く人自身にとっても分かりやすくするためには、年表と本文それぞれのよさを生かすように割り切って書いた方がよいといっているのである。

(12) 『自分史のつくり方』主婦と生活社、50；58 頁。

(13) 色川大吉『自分史—その理念と試み』講談社、1992 年、24 頁。

(14) 日本史年表の類よりも、その年毎のできごとや流行などを集めた本の方が面白い。これまで授業でよく使ってきた本では、その年の 10 大事件とともに、話題の商品、ヒットした音楽や本などがランキング形式や特集コラムでまとめられている。こんなことがあったのかという「発見」だけでなく、順位付けが自分たちの記憶や認識とズレている理由を考えるなど、色々な楽しみ方ができる。『1946-1999 売れたものアルバム』東京書籍、2000 年。

(15) 授業では、参考用の例（『自分史のつくり方』［主婦と生活社］48-49 頁など）をプリントで配布しているので、それにならって似顔絵イラストとその人を紹介する簡単なコメント付きの家系図が多い。案外、学生たちが知らないのが、親の年齢や親戚の名前（漢字）で、この課題があやふやな点を確認するよい機会になっている。

(16) 地図作りは、社会科の学習ではわが町観察によく利用される基本ツールであるが、「まちを知る」から「まちを表現する」「まちの未来像を描く」へと展開し、町づくりに活かそうとする試みもある。例えば、世田谷まちづくりセンター編『わが町発見！絵地図づくりからまちづくりへ』晶文社、1995 年。

(17) 先に触れた橋本義夫の勧めを想起されたい。前掲註(13)参照。